

## 短歌・俳句の読解

今回の学習のポイント

- ① 和歌、短歌、俳句の違いを知ろう
- ② 短歌について
- ③ 俳句について

国語監修・執筆

鈴木 周太

### 和歌、短歌、俳句の違いを知ろう

#### ■和歌と短歌

「和歌」あるいは「短歌」とは、何でしょうか。もともと「和歌」とは、中国の歌である「漢詩」に対して、「和」の国（日本）で詠まれた〈歌〉をさします。和歌は、歌の形態（字数）によって、短歌・長歌・旋頭歌などと呼ばれます。しかし、徐々に短歌（五・七・五・七・七の三十一文字からなる定型詩）以外の歌は詠まれなくなり、平安時代以降は、和歌と言えば、普通「短歌」をさすようになりまし。明治期に入ると、「和歌」は、平安時代などの「古典短歌」のみをさし、「短歌」は、近現代に作られた短歌をさすようになりまし。

#### ■俳句

「連歌」という文芸が、鎌倉・室町時代に流行していきまし。それは、「五・七・五・七・七」の短歌を、五・七・五の句と七・七の句にわけ、二人以上の人で交互に読み続けるものです。その連歌に滑稽味やおもしろさを加えたものを「俳諧連歌」と言います。やがて、江戸時代に入り「俳諧連歌」は、松尾芭蕉らによって芸術にまで高められ、「俳諧」と呼ばれるようになりまし。明治以降は、「連歌」に対して「俳諧」を特に「連句」と呼ぶようになりまし。俳諧の第一句目にあたるものを「発句」といい、現在の俳句と同様に詠まれまし。やがて、明治時代に正岡子規を中心に、五・七・五の定型詩が「俳句」と呼ばれるようになりまし。

### 短歌について

#### ■形式

「短歌」は普通、五・七・五・七・七の三十一音からなりまし。ですから、「短歌」を、別名「三十一文字」と言います。

#### ■句切れ

意味や調子の上で歌の切れ目のことを「句切れ」と言います。

五・七・五・七・七の句で、初めの五字で切れるものを「初句切れ」以下「二句切れ」「三句切れ」「四句切れ」と言います。句切れのないものもあります。この句切れによって、歌に調子が生まれます。

- 初句切れ・三句切れ（五／七・五／七・七） ↓ 軽快で優雅な感じを与える。
- 二句切れ・四句切れ（五・七／五・七／七） ↓ 荘厳で力強い感じを与える。

### ■ 短歌の表現技法

- ① 比喩……ある物事を、他の似たような事物を用いて例えること。  
▼ 彼は、太陽のように温かい人だ。

- ② 倒置法……言葉の順序を入れ替えて強調すること。

▼ お昼には、お弁当を食べる。

↓ お弁当を食べる、お昼には。

（「お弁当を食べる」が、強調される。）

- ③ 体言止め……句や歌の末尾を体言で終わらせること。

▼ 春は、あけぼの。（が、趣がある。） 『枕草子』

↓ （ ） の中が省略されて、体言で文が終わっている。

- ④ 字余り、字足らず……定型の和歌の文字数より多いものを「字余り」文字数より少ないものを「字足らず」と言う。

歌の字数を数えると、五・八・五・七・七になっていた場合。

↓ 本来、七字のところは八字になっているので、字余り。

- ⑤ 押韻……各句の初めの音や終わりの音をそろえてリズムを出すこと。

われ男の子意気の子名の子つるぎの子詩の子恋の子ああもだえの子

与謝野鉄幹

- ⑥ 枕詞……特定の語句を導くための言葉のこと。

久方の 光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

紀友則

〈訳〉 日の光がのどかに照らすこの春の日に、どうして落ち着いた心もなく桜の花が散るのだろうか。

「久方の」が「光」を導く。



## 俳句について

### ■形式

俳句は普通、五・七・五の十七音からなります。

### ■季語

俳句では、「季語」という季節感を表すための語句を読みこむ必要があります。季語は、一句に一つが原則です。

↓ただし、自由律俳句という、五・七・五の定型や季語にこだわらない俳句もあります。

### ■切れ字

強調するところをはっきり示すために、特に句中で切れる働きをする語を言います。「や・かな・けり・ぞ」などがあります。

### ■句切れ

短歌と同じく、意味や調子の上で句の切れ目のことを「句切れ」と言います。切れ字や季語によっても切れます。

### ■俳句の表現技法

俳句にも短歌と同じく、さまざまな表現技法があります。

- ① 比喩ひゆ
- ② 倒置法とうち
- ③ 体言止めたいげんと
- ④ 字余り

(説明や例は、前述の「短歌の表現技法」の項を参照)

## まとめ

短歌や俳句の形式、表現技法について、述べてきました。番組で金田一先生がおっしゃっていますが、短歌や俳句を詠むことで、そのときの思いや瞬間を言葉として「形」に残すことができます。言葉によって、風景や気持ちを切り取るることができるのです。言葉を学ぶということは、世界をよりよく知っていくための手段です。ぜひ、みなさんも短歌や俳句を作ってみてください。自ら詩作をすることで、言葉に対する感覚が磨かれていきます。そうすると、さらに言葉を知ることができます。これを繰り返すことで、世界をより良く見つめることができます。国語を学ぶこと、言葉を学ぶことを通して、世界の美しさを味わってほしいと思っています。